

中英語詩に描かれた老齡の苦惱

“Elde,” “Heye Louerd, Thou Here My Bone,” “Herkne to My Ron”

和田葉子

死にまつわる教訓的な中英語詩は多く残っている。しかし、死への過程である老齡に焦点を絞った中英語詩は数少ない。本発表では、その代表的な作品として、14世紀の3つの作品、(1) MS Harley 2253 に収められている “Heye Louerd, Thou Here My Bone” (主よ、私の祈りをお聞きください) と (2) 同じく MS Harley 2253 収録されている “Herkne to My Ron” (私の歌を聴いておくれ)、そして (3) アイルランドで書かれた London, British Library, MS Harley 913 に収録されている “Elde” (老齡) を取り上げ、これら3つの作品を通して、中世の人々にとって、老齡とはどういうものであったのかを考察した。

これらの3つの詩はいずれも高齡の男性による独白という形式をとっており、年老いて肉体的に衰えた今の自分と、若き日の元気でりりしく、羽振りの良かった頃の自分を対比させて嘆く歌になっている。こうした共通点を持つのは、これら3作品が、6世紀のローマの詩人マクシミアヌスの作とされるラテン語で書かれた『哀歌』と呼ばれている686行からなる詩をモチーフにして書かれているためである。ちなみにこの作品は、中世のヨーロッパで学校のラテン語のリーダーのテキストとして多くの生徒たちに読まれていた。“Herkne to My Ron”の作品中にはマクシミアヌスへの言及があり、13世紀後期に筆写された Oxford, Bodleian Library, MS Digby 86 に収められている “Herkne to My Ron” の書き出しのすぐ上の行には、赤で “Le regret de maximian” と記されている。

これら3作品の元になったマクシミアヌスの『哀歌』は全部で6つのパートから構成されており、エレジー1では、老人となったマクシミアヌスが元気で華やかだった若かりし日を思い出し、それとは対照的に、老いてしまった今の自分の様子とその苦痛と悲しみを一人称で嘆く。彼は、老人なら誰でも抱える切実な病気や体に生じる厄介な問題について語り、同時にそれに伴う真情を吐露する。かつて享受していた娯楽を楽しめなくなってゆくことを惨めに思い、長く続く老いの苦しみから逃れるために早い死を強く望む気持ちが表現されている。エレジー2ではマクシミアヌスが長く一緒に暮らした女性が、老人になった彼を忌み嫌い去って行く。エレジー3と4には若い頃、うまくゆかなかった彼の恋愛経験が語られる。エレジー5では高齡となったマクシミアヌスが、コンスタンチノープルで出会った若く美しいギリシャの乙女に現を抜かし、仲良くなるが、老齡のため男としての勤めを果たせなくなる。結局、彼女は彼の一物の「死」を弔う歌を歌い、さらには、この世の万物の生命の源となる男根を称える壮大な内容の歌を吟じて、去って行く話が語られる。

この『哀歌』のエレジー1を元に書かれた3つの中英語詩を比べてみると、それぞれ趣を異にしていることがわかる。Rosemary Woolf は *The English Religious Lyric in the Middle Ages* (Oxford University Press, 1968) で、3つの詩を比較して “Heye Louerd, Thou Here My Bone” は、他の2作品より “more serious, penitential and exemplary” (p. 104); “provides a model for imitation” (p. 105) と述べているが、果たしてそうであろうか。確かに、“Heye Louerd” は七大罪にも言及し、神様に罪の許しを請う悔悛の詩の形式をとっているが、この詩の老人には、未だ物欲へのこだわりが残っていると考えられる箇所がいくつも見られる。また、『哀歌』のマクシミアヌスのように若い頃の自慢話を繰り返しつつ、何とか天国へ行けるよう必死に神頼みをしている。Woolf の言う、より真面目な悔い改めの模範とすべき詩とは言い難いが、不完全であるが故の人間味を感じさせる作品になっている。

“Herkne to My Ron” には『哀歌』と同様に、美男子で体力もあり、人々に賞賛されていた過去と惨めな現在の対比が多くされ、死によって老いの苦しみから解放されたいという強い気持ちが表現されている。しかし、老人の死への恐怖が語られているところは『哀歌』と異なっている。死後、どこへ行くのだろうか、そして、過去に自分が犯した罪を思い出し、天国にゆけるのだろうか、と大きな不安にかられる。この詩には、また、中世の教訓詩によく見られる運命の車輪や無常観、そしてメメントモリの思想も盛り込まれている。そして、最後に、老人は自分が嘆いているのは自分の犯した罪であると告白し、神に罪の許しを請う死の床にいる老人を思わせる形で終わっている。Woolf は同じ作品の MS Digby 86 のヴァージョンを取り上げて、老人の思考は乱れているが、力強く描かれている “an example of rebellion” だと述べている。(p. 105) 確かに、MS Digby 86 では全体を通して、論理的に書かれておらず、あちこちで同じことが繰り返し語られる。それが、いかにも老人の繰り返しの響くのだが、意図的にそう書かれているのか、あるいはテキストが不完全なためなのか、は定かではない。このヴァージョンで、驚くべきは、若ければ自分を馬鹿にする連中をやり返してやるのに、という老人の言葉で詩が終わっていることである。Woolf は rebellion と評しているが、この老人が老いに立ち向かうわけではなく、間違いなく立ち向かえない、やるせなさを爆発させているに過ぎない。どうしようもない最

後の足掻きのように、面白くも、切なくもある。また、“Herkne to My Ron”のこれらいずれのヴァージョンにも、wif (=wife) が登場し、夫であるマクシミアヌスに悪態をつくところは、大衆が聞いて楽しめるようにした演出なのかもしれない。あるいは、wifとは妻ではなく、長く連れ添っていた、『哀歌』のエレジー2に登場するマクシミアヌスが長く連れ添った同棲相手のことかもしれない。

“Elde”は、Woolfの言うように、他の2つの作品に比べて“the least didactic”であり、下品 (“far less soberly decorous”) (p. 105) に聞こえる内容かもしれない。男性の老化現象の中でも、普通なら公に口にしないようなことまで、老人に露骨に語らせているからである。しかし、『哀歌』にヒントを得て、マクシミアヌスが最も不満とする内容を、あからさまにテーマにしているのは、他にも毒のある諷刺のきいた作品を収録しているMS Harley 913の一作品として、驚きではない。“Elde”に登場する老人の表現する感情はまさに『哀歌』のマクシミアヌスそのものである。“Elde”には、中世ヨーロッパでよく知られていた死の兆候を示す体の状態も織り込まれ、老人がまさに死に向かっていることが示される。衰弱した老人の立ち振る舞いは、極端な頭韻によって、彼をからかっているかのようにも響くのだが、最後のスタンザで空気は一転する。そこで「老齡」が老人の足元から忍び寄り、地中へと彼を引きずり込もうとしていることが暗示される。今や「老齡」は「死」へと変身する。この作品のすぐ後には、土くれから生まれた人間は土くれに帰る、をモチーフにした“Earth” (土くれ) の詩が筆写されている。“Elde”はWoolfに最も気に入られなかった作品のようであるが、3つの作品の中で最も生々しく、不真面目な笑いを誘いそうな老いの描写から、一気に死へと急転する最後のドラマティックなスタンザは聴衆を震え上がらせる。

このように、これら3篇の中英語の作品は、通常の悔悛の教訓詩とは異なり、老齡をきわめて私的な悩みとして語る形式をとっている。中世に生きた人々が当時、老齡をどう感じていたか、死を目前にしてどのような思いをしていたのか、彼らの心の叫び声が聞こえてくる作品となっている。